

セクシユアルヘルス事業 「性」「カラダ」「人を好きになる」と」

セクシユアルヘルス担当者会

みなさん「性的健康」という言葉を聞いたことがありませんか？ それでは「性の権利」という言葉は？
20年ほど前ですが、性暴力の被害のあと、妊娠・中絶をした大学生と出会いました。そのあとに出会った障がいのある女性は、女性器に痛みを感じるものの、どのように表現してよいのかわからず、ずっと我慢していました。「彼氏に嫌われたくない……」とセックスを断れずにいた中学生は、妊娠を心配して青少年活動センターに駆け込んできました。私は、彼女たちとの出会いを通して、「性」のことが話せるユースワーカーになろうと決めました。「性」のことを話すの」とびつくりする同僚もいましたが、何も自分の経験を話すわけではないのです。若者が「性」について困っているときはもちろん、困る前に必要な情報や正しい知識を届けること、一緒に考えることのできる大

人の存在が必要だと思ったのです。
手探りで進める中で「セクシユアルヘルス＝性的健康」「セクシユアルヘルスライツ＝性の権利」という言葉に出会い、私たちのやるべきことが見えてきました。これらを実現するためには、若者にアプローチするだけでなく、かれらの育ちを支える援助者や地域の人々も巻き込み、若者の生活のあらゆる場面で想像しながら進めることが必要だと気づきました。
現在、若者の「性」「カラダ」そして「人を好きになること」……これらを切り口に青少年活動センターでは、若者、地域の人々、関係機関と力を合わせながらさまざまな取り組みを行っています。

南青少年活動センター所長 横江美佐子

2002年

「ユース3」のスクエア（青少年総合相談窓口）の一分野として、「若者のセクシユアルヘルスに関する支援プログラム」として事業を開始
HIV/AIDSポスター展、ロビープログラムの実施

2003年

教育現場での取り組み報告と
支援者ネットワークづくり

2004年

「みさやまミーティング（ピアサポーター養成講座）」
を開始（独立行政法人福祉医療機構助成金にて実施）



2005年

青少年向け相談事業「レンアイリヨク向上委員会」
を開始

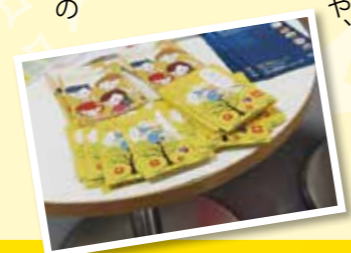
2006年
ユースサービス協会企画委員会にて全事業所での実施を検討

2011年

京都市保健センターなどの協力を得てエイズ即日検査や、
パネル展示の実施

2013年

デートDV・エイズ予防啓発リーフレットの作成
（エイズ予防財団助成金にて実施）



2014年

各種イベントでの啓発活動の実施

若者のセクシユアルヘルスに関する問題に対し「昔はそんなことを教わらなくても生きてこられた」「他の人が取り組むべき」など、避けるような態度が援助者の中で散見されます。前者に関しては、今はインターネットの時代です。商業的な、つまり現実と乖離した性の情報は、以前と比べ、はるかに手に入りやすく、ある部分は過激に、そしてずっと生々しくなっているように見受けられます。そんな環境の中で、昔と同じやり方は通用しません。後者に関しては「そう言わず、それぞれの得意な方向で、皆が取り組みやすいの」と思います。その理由はふたつあり、ひとつ目は、人の困りごとに対して援助者が行う解決のための提案は多様なほうがよいからです。ふたつ目は、若者のセクシユアルヘルスの問題を丁寧に取り組むことによって得られるものは、その問題の直接的な解決——例えば、望まない妊娠が減らせるとか、性感染症への罹患が減らせるとか、そればかりではないからです。セックスは非常に個人的なものでもあり、その行動を変えるのは簡単ではありません。親や教師など大人には「若者がコンドームを使うべき理由」がありますが、若者にも使わない理由がいくつもあります。私たち大人は、いつ、なぜ、どのように、コンドームを使う理由を得たのでしょうか。どう

エイズ予防啓発に関するポスター
を作成しました。（2015年度）
当事者の目線に立った内容にするため、大学生を中心とした若者が作成に関わりました。「恋愛」を切り口にエイズを含む性感染症の予防啓発につながるメッセージを織り込むことで、パネルを見る若者が自分のこととして考

えられるよう目指しています。
（一般社団法人 未来支援委員会 助成金にて実施）

エイズデーなどの予防啓発イベントに加えて、各青少年活動センターで取り組まれるお祭りなどの各種イベントでのパネル掲示、啓発ブースを設置しています。内容によっては、コーディネーターや大学生を中心としたボランティアサポーターが来場者の理解を深められるよう手助けを行っています。



青少年活動センターの利用者を対象にロビーを使った交流事業を行っています。掲示等の間接的な関わりを通して、若者の恋愛観や性に関する疑問を知ることができます。また、個別相談につながるケースもあります。
下京青少年活動センター
齊藤彩乃



すればそれを若者と共有できるでしょうか。私が「ユースワークがセクシユアルヘルスを積極的に扱えばいいの」と思う理由はそこにあります。ユースワークが目指すことは若者の成長、つまり、若者が自分の声をもち、所属するコミュニティに対する影響力と自身の居場所を自分で作れるようになることです。それは、コンドームを使う理由をもたなかった若者が、自分のセックスには病気や妊娠の可能性があることを認識し、それについて考え「コンドームを使わない」と思い、そして自分のセックスの相手と話し合えるようになる、という変化と密接に繋がっています。そういう意味で、若者のセクシユアルヘルスの問題をユースワークの中で扱うのは「おいしい」ことだと思っております。ユースワークにとって、あるいは他の若者育成を扱う分野にとって、セクシユアルヘルスは敬遠されてしまつ分野かも知れませんが、最初に感じる不慣れがゆえの困惑や嫌悪感を超え、お互いにとって「1+1=2」以上の効果が望めるような協働に挑戦できるなら、若者を巡る状況がどんどん悪化するこの時代に、有意義なことなのではないでしょうか。

京都精華大学非常勤講師 あかたちかこ